特選
2019
日本銀行
総裁賞

第52回「おかねの作文」コンクール

「活(い)きたお金」とは

福島県・いわき市立磐崎中学校　２年　今野　優花

2011年３月11日、14時46分。大地震による津波と福島第一原子力発電所の事故により、東北地方が大規模な災害に見舞われました。その頃、私は６歳でした。まだ幼かったので、その時の状況をすぐにのみ込むことができませんでした。そんな中、今でもはっきりと覚えているのは、たくさんの被害とたくさんの支援です。

私は家に帰れないという状況が続き、とても不安な気持ちになりました。また、私が避難した体育館は、家が半壊・全壊で帰れない人であふれていました。泣いている人もいました。不安でいたのは私だけではないんだと思いました。寒い体育館では場所を譲り合いながら過ごしました。水も毛布もみんなで分け合いながら少しずつ使いました。周囲の商店では、口にできるものがなく、たくさんの人たちで共有していた限りのあった水や食料はだんだん減っていきました。だんだんと減ってきた食料を見て、何も口にできない日が近づいてきているのかと不安な気持ちで一杯でした。

そんな中、私たちを助けてくれたのは、他県から届けられたたくさんの支援でした。自衛隊やボランティアの方々を通して支給された大量の水や食料で私を含めたくさんの方々が助けられました。その支援物資も誰かがお金で買って届けてくれたものだと後から気づきました。支援物資はタダではなくて、たくさんの方々の協力を得て届けられているものだと分かりました。人が人の為(ため)に協力ができるのってすごくいいことだと思いました。

また、復興のために、たくさんの募金もしてもらいました。そのお陰で、８年の時を経て、私たちは今、ほとんど以前と同じ暮らしを取り戻すことができています。私は、これこそが「活きたお金」だと考えました。普段何気なく使っているお金にも人と人との繋がりが見えてきました。たくさんの方々が募金してくれたお金には、メッセージが書かれているわけでもないけれど、応援や励

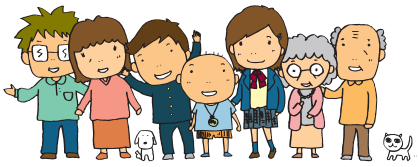
© 金融広報中央委員会 2019

ましの意味が込められているんだと考えると、とても温かい気持ちになりました。

こうした「誰かのために使われるお金」は他にもたくさんあることに気づきました。それは、病気の人のための募金です。重い心臓病を患った人が移植のために必要な大金を募金しているという報道を耳にしたことがあります。その人は、たくさんの方々からの協力で命が救われました。また、このような形で助けられた人が他にもたくさんいると思います。このように、温かい手を差し延べてくれる方たちが世界にはたくさんいます。また、世の中には食料に乏しい国や厳しい自然環境に暮らす人たちもたくさんいます。そのような国を少しでも良くするためにも私たちの協力が必要だと思います。日本だけでなく、世界に目を向け現状を知り、少しでも多くの募金で、少しでも多くのワクチンなどの薬や衣類、食料が与えられるといいです。

募金の他にも、私たちの学校では、アルミ缶の回収を行っています。回収したアルミ缶を売り、そのお金で私たちの生活に必要なものや車イスを買うことができます。私たちの小さなことでも、役に立っているんだと考えると嬉(うれ)しい気持ちになります。これから、小さなことにも協力できるといいです。

「活きたお金」とは、本当はどのような状況で使われるお金なのかは分かりません。それでも、私の考える「活きたお金」とは、世の為、人の為に使うものだと思いました。お金には、金額だけでなく、温かい「気持ち」という価値があるんだと思いました。温かい手を差し延べられると誰もが嬉しい気持ちになります。世界中の一人一人が持っている温かい手を差し延べられるような、そんな世の中になるといいです。「ちりも積もれば山となる」ということわざがあるように、まずは「活きたお金」というものを知り、募金などの小さなことから始めて、少しでも多くの人が笑顔へと変わるといいです。人はみんな支え、支えられて生きていることを自覚して、これからも人と人とが繋がっていけるといいと思います。



© 金融広報中央委員会 2019